

学校適応感とその改善方法に関する研究 — 体育祭による学校適応感の変化 —

How can we improve children's adjustment in school?
— A study of school adjustment of junior high school students
before and after sport's day —

石川 章子
志木市立教育
サポートセンター
Akiko Ishikawa
Shiki City Support Center
of Education

山口 豊一
跡見学園女子大学
文学部臨床心理学科
Toyokazu Yamaguchi
Department of Clinical Psychology,
Faculty of Letters, Atomi University

松崎 くみ子
跡見学園女子大学
文学部臨床心理学科
Kumiko Matsuzaki
Department of Clinical Psychology,
Faculty of Letters, Atomi University

要 約

児童生徒の学校適応は大切な課題であり、どのような働きかけがその向上に役立つかを検討することが大切である。本研究においては、体育祭前後での「学校適応感」と「状態自尊感情」得点を、中学生403名を対象に調査し、検討した。体育祭前後で得点に変化した領域は、学校適応感のうち「進路領域」と「状態自尊感情」であった。学年ごとの検討では、1学年は「学校適応感全体」の得点が低くなり、2学年は「学校適応感全体」と「学習領域」の得点が高くなり、3学年は「学校適応感全体」の得点が高くなった。登校場所ごとの検討では、相談室登校生徒において、「学校適応感全体」と「心身の健康領域」の得点が高くなった。

また、「学校適応感」と「状態自尊感情」の関連を調べると、学校適応感の中でも「心身の健康領域」の得点が「状態自尊感情」に中程度の影響を与えていることがわかった。

以上のことから、体育祭が中学生の「学校適応感」や「状態自尊感情」を高めるための援助サービスとして活用できる可能性が考えられる。さらに、相談室登校生徒などに対する二次的援助サービスや三次的援助サービスとしての機能も果たす可能性が示唆された。しかし、生徒によっては逆に「学校適応感」が低くなる危険性もあるため、配慮や注意が必要である。また、「心身の健康領域」の学校適応感を高めるはたらきかけが間接的に「状態自尊感情」を高める可能性が示唆された。

【Key Word】学校適応, 状態自尊感情, 中学生, 体育祭, 相談室登校

I 問題と目的

近年、学校が抱えている問題は多様化し、不登校、校内暴力、いじめ、怠学、非行などさまざまな不適應問題が課題となっている。特に中学校におけるこれらの問題は深

刻である。文部科学省の調査によると、平成22年度の中学校の不登校生徒の割合は2.74%（文部科学省，2010）、平成22年度のいじめを認知した学校の割合は42.5%（文部科学省，2010）と、非常に多い。これらの

ことから中学校の不適応生徒の問題の大きさがうかがえる。このような子どもたちの問題を解決するための1つの方法として渡部(1994)は特別活動に注目している。特別活動とは、中学校では「学級活動」「生徒会活動」「学校行事」の3つを指す。特別活動の目標は「心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的・実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己をいかす能力を養う」こととされる(文部科学省, 1998)。つまり、「人間としての生き方についての自覚を深め、自己をいかす能力」を自主的・実践的な集団活動を通して育成していくことであり、今日の中学校在抱えている不登校やいじめなどの不適応問題に対して有効であると考えられる(渡部, 1994)。しかし、2002年度から実施された完全週5日制により、授業時数が減少した。さらに、「ゆとり教育^{*1}」から「学力重視型^{*2}」への移行により、学校行事が過度に削減されている事例もある。そこで、その効果を改めて見直す意味でも学校行事に関する研究の必要性を感じた。

学校行事に関する先行研究は、そのあり方や取り組みについてのものが主であり、中学校における学校行事の効果を「学校適応感」の観点から扱ったものはほとんどない。また、学校適応感に関する研究はいくつかあるが、学校適応感の尺度として、スクールモラールテスト(小学生用：学級適応診断検査：SMT, 日本文化科学社, 中学生用：河村, 1999b)や学校生活満足度尺度(河村, 1999a)など、似た概念を測定する尺度を学校適応感尺度として使用しており、直接「学校適応感」を測定しているとは

いえない。また、学校適応感尺度を使用している場合も、生徒を包括的に捉えることができるようなものは少ないように思う。そこで、本研究では、学校心理学の視点から生徒を包括的に捉えることができるように開発された、水野・石隈・田村(2003)の学校適応尺度を参考に、対教師関係の項目を含めた新たな学校適応感尺度を作成した上で調査研究を行う。

また、子どもの発達において肯定的な自尊感情は非常に重要である。河村(1999)や久世・二宮・大野(1985)は、学校に適応している生徒は自尊感情も高い、と報告している。一方で、遠藤(2000)や蘭(1992)は、自尊感情が高い者は適応的である、と述べている。このように、学校適応感と自尊感情とは関連が深いことがうかがえる。

そこで本研究では、新たに作成した学校適応感尺度と、状態自尊感情尺度を使用し、体育祭が生徒に与える影響について検討する。

II 調査

1. 目的

体育祭前後の学校適応感と状態自尊感情の得点の変化を検討する。

2. 方法

1) 質問紙の構成

(1) フェイスシート

「中学生の学校生活に関するアンケート」と題して質問紙調査の趣旨を説明し、「今日の日付」「学年・組・出席番号」「運動は得意ですか？(得意/普通/不得意)」「体育祭は好きですか？(好き/普通/嫌い)」について記入を求めた。

(2) 学校適応感尺度

水野ら(2003)によって作成された適応尺度を参考に質問項目を選定した。まず、水野ら(2003)の先行研究における因子分析の結果から因子負荷量が0.6以上の項目を採用し、心理学を専門とする研究者、および大学院生2名により他の学校適応感尺度やCornell Medical Index(CMI健康調査表, Keeve・Albert・Harold, 1949)などを参考に新たな質問項目を追加した。その後、中学校教諭2名により、学校適応感尺度の各下位領域としてふさわしいか、内容的妥当性の確認を行った。さらに、倫理を冒すような質問項目はないか、中学生が回答するにあたり、わかりにくい言葉や表現はないかなど質問項目について確認を行った。指摘された箇所については、表現を改めたり、補足で説明を付け加えたりした。最終的に38項目を質問項目として使用した。そこで得られた38項目の質問に対して因子分析を行い、最終的には学校適応感尺度として36項目の質問を使用した(表1)。クロンバックの α 係数は、それぞれ表の通りであった。

下位領域の構成は、「心身の健康領域：14項目」「陰性感情領域：7項目」「友人関係領域：5項目」「学習領域：4項目」「先生との関係領域：4項目」「進路領域：2項目」の6領域である。

また、中学校教諭2名により中学生の「学校適応感」を測定する尺度として適切であるかどうか検討をし、内容的妥当性の確認を行った。その際、「学校の勉強の中で、得意な教科や好きな教科がある」という質問項目は、2つの質問が並列しているため回答しづらいのではないかと指摘があったため、「学校の勉強の中で、好きな教

科がある」に改めた。

「まったくあてはまらない」から「とてもあてはまる」までの4件法で、得点が高いほど肯定的な状態を表す。

(3) 状態自尊感情尺度(阿部・今野, 2007)

9項目からなり、その時々々の自尊感情を捉えることができる。

「まったくあてはまらない」から「とてもあてはまる」までの4件法で得点が高いほど肯定的な状態を表す。

2) 調査時期

(1) プレテスト

A中学校は、2009年9月2日～9月9日に質問紙調査を実施した。

B中学校は、2009年9月3日～9月8日に質問紙調査を実施した。

(2) ポストテスト

体育祭は、9月12日に実施され、その後ポストテストを実施した。

A中学校は、2009年9月24日～10月8日に質問紙を実施した。

B中学校は、2009年9月15日～9月18日に質問紙を実施した。

3) 調査方法

関東地方のA中学校・B中学校に協力を依頼し、計631名(A中学校414名, B中学校217名)に質問紙を配布した。なお、学校長の承諾のもと、学校長から各担任へ調査の概要の説明や質問紙調査の実施依頼を行い、担任が学級ごとに実施後その場で回収し、後日著者が受け取りに行った。

表1 学校適応感尺度の因子分析結果(Promax回転後の因子パターン)

項目内容	I	II	III	IV	V	VI
第一因子【心身の健康】 $\alpha = .88$ (全14項目)						
25. 何となく不安になることがある。	.74	-.07	.09	.02	-.01	-.05
27. さびしくなることがよくある。	.72	-.15	.08	.06	-.04	-.10
26. 気持ちの変化が激(はげ)しい。	.72	-.05	-.06	.02	.00	.02
30. 頭が重いことがある。	.68	.09	.01	-.06	-.01	.11
29. 自分の性格の問題で悩んでいる。	.65	-.15	.09	.05	.00	.00
28. いらいらすることがよくある。	.63	.16	-.05	-.05	.07	.02
33. 夜眠れないことがある。	.62	-.02	.02	.04	-.07	.07
31. 体がだるいことがある。	.60	.22	-.09	-.13	.02	.16
32. お腹が痛いことがある。	.58	.09	-.12	-.11	.11	.19
35. 疲れやすいことがある。	.53	.18	.00	-.06	-.05	.05
22. 授業中であてられると緊張する。	.52	-.16	.01	.06	.11	-.15
23. 試験のときに緊張しやすい。	.49	-.10	-.05	-.04	.02	-.16
34. 食欲がないことがある。	.39	.12	.02	.10	-.08	-.01
21. あまり理解できていない授業がある。	.33	.10	-.26	.23	-.01	-.09
第二因子【陰性感情】 $\alpha = .82$ (全7項目)						
15. 学校さえなかったら毎日が楽しいだろうと思う。	-.12	.77	-.07	-.02	.07	.02
17. 日曜の夜、また明日から学校だと思うと気分が重くなる。	.00	.74	-.06	-.09	.08	.03
7. 学校はつまらない。	-.08	.73	.15	.08	.04	-.05
10. 学校はゆううつだ。	.03	.69	.05	.02	-.09	.01
19. 学校では嫌なことばかりある。	.21	.54	.19	.00	-.05	-.13
24. 学校のことを考えると気分が悪くなる。	.29	.46	.10	.09	-.10	-.08
13. 学校に気の合わない先生がいる。	.01	.32	-.21	.07	.10	-.09
第三因子【友人関係】 $\alpha = .83$ (全5項目)						
3. 学校に気軽に話せる友だちがいる。	-.11	.05	.86	-.07	-.07	.01
1. 学校の中に一緒にいて楽しくなる友だちがいる。	-.12	.12	.74	.03	-.12	.01
6. 学校の友だちとうまくやっている。	.08	-.02	.74	.05	.04	.01
2. 学校の友だちと一緒によく遊ぶ。	.03	-.03	.61	-.16	.13	.02
5. 学校の友だちに受け入れられている。	.19	-.13	.59	.06	.12	-.03
第四因子【学習】 $\alpha = .78$ (全4項目)						
18. いっしょうけんめい勉強している。	-.05	-.05	-.06	.75	-.04	.11
16. 授業に集中することができる。	.16	-.06	.02	.74	-.10	-.05
14. 学校の勉強が楽しい。	-.04	.17	-.14	.67	.15	-.03
20. 学校の勉強の中で、好きな教科がある。	-.12	.08	.11	.44	.05	.20
第五因子【先生との関係】 $\alpha = .76$ (全4項目)						
9. 学校に気軽に話ができる先生がいる。	.05	.02	.09	-.07	.82	-.05
8. 学校に自分の悩みを相談できる先生がいる。	-.02	.10	-.11	-.03	.80	-.03
11. 学校に授業のおもしろい先生がいる。	-.10	.03	.13	.20	.41	.07
12. 学校の先生の前でも自分らしくふるまっている。	.06	-.11	.28	.14	.38	.05
第六因子【進路】 $\alpha = .85$ (全2項目)						
38. なりたい職業や興味のある職業がある。	-.02	-.05	-.02	.03	-.02	.87
37. 自分の将来に夢や希望を持っている。	.05	-.06	.05	.08	-.03	.76
因子間相関	I	II	III	IV	V	VI
I	—	.54	.26	.10	.01	.07
II		—	.29	.38	.24	.21
III			—	.32	.30	.35
IV				—	.48	.40
V					—	.34
VI						—

4) 倫理的配慮

調査は無記名で行い、調査への協力は任意であること、得られた回答は統計的に処理し、個人が特定されないこと、成績や評価に関係ないことを伝えた。

Ⅲ 結果と考察

1. 分析対象

1) プレテスト

A中学校においては、回収できた383名分中、プレテストにもポストテストにも

空欄や記入ミスなどがなかった計255名分の質問紙を調査の分析対象として採用した。有効回答率は66.6%であった。同様に、B中学校においては、回収できた217名分中、プレテストにもポストテストにも空欄やミスなどがなかった計148名分の質問紙を分析対象として採用した。有効回答率は68.2%であった。A中学校B中学校合計の有効回答数は403名であった。詳細な内訳を表2に示す。

表2 有効回答数

A 中 学 校	1学年		2学年		3学年		合計	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
	44名	42名	34名	39名	47名	49名	125名	130名
	計86名		計73名		計96名		計255名	
B 中 学 校	1学年		2学年		3学年		合計	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
	26名	20名	24名	26名	31名	21名	81名	67名
	計46名		計50名		計52名		計148名	

2) ポストテスト

A中学校においては、回収できた386名分中、プレテストにもポストテストにも空欄や記入ミスなどがなかった計255名分の質問紙を調査の分析対象として採用した。有効回答率は66.1%であった。B中学校においては、回収できた217名分中、プレテストにもポストテストにも空欄やミスなどがなかった計148名分の質問紙を調査の分析対象として採用した。有効回答率は68.2%

であった。A中学校B中学校合計の有効回答数は403名であった。有効回答数とその内訳はプレテストと同様である(表2)。

2. 基礎統計

分析対象者全体(403名)における「学校適応感」、学校適応感の各下位領域、「状態自尊感情」の最大値、最小値、平均値、標準偏差を表3に示す。

表3 基礎統計

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
学校適応感尺度全体	36	140	100.75	15.4
心身の健康領域	14	56	37.83	8.54
陰性感情領域	7	28	18.57	4.68
友人関係領域	5	20	17.37	2.62
学習領域	4	16	10.89	2.77
先生との関係領域	4	16	10.17	3.04
進路領域	2	8	5.92	1.86
状態自尊感情	9	36	23.74	5.05

3. 学校適応感および状態自尊感情得点の体育祭前後での比較

1) 男女別での検討

男女別での体育祭前後の「学校適応感」、および「状態自尊感情」の得点の変化の違い

を検討するために、性別(男子・女子)とテスト時期(体育祭前・体育祭後)を独立変数、「学校適応感全体」の得点、各下位領域得点、および「状態自尊感情」得点を従属変数とした二要因の分散分析を行った(表4)。

表4 テスト時期と性別による各得点と分散分析結果

テスト時期	体育祭前		体育祭後		主効果		
	男子 n=206	女子 n=197	男子 n=206	女子 n=197	性別 47名	テスト時期 49名	交互作用
学校適応感全体	101.89 (16.15)	98.55 (13.78)	102.09 (16.68)	98.83 (14.31)	5.11* 男子>女子	0.28	0.01
心身の健康	39.38 (8.54)	35.59 (7.89)	39.49 (8.83)	36.11 (8.00)	22.24** 男子>女子	0.89	0.39
陰性感情	18.56 (4.79)	18.55 (4.41)	18.42 (4.97)	18.61 (4.52)	0.04	0.06	0.35
友人関係	17.38 (2.78)	17.51 (2.37)	17.12 (3.04)	17.38 (2.33)	0.64	3.53	0.39
学習	10.65 (2.65)	10.92 (2.38)	10.98 (3.02)	10.87 (2.45)	0.11	2.08	3.87
先生との関係	10.28 (3.00)	10.10 (2.67)	10.25 (3.36)	9.89 (2.67)	0.99	1.20	0.75
進路	5.65 (2.08)	5.88 (1.79)	5.83 (2.04)	5.97 (1.69)	1.17	4.36* 体育祭後>体育祭前	0.46
状態自尊感情	23.25 (5.39)	22.34 (4.25)	24.04 (5.49)	23.10 (4.31)	4.03* 男子>女子	22.72** 体育祭後>体育祭前	0.01

上段：平均値、下段：標準偏差
(*: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$,)

性別による主効果は、「学校適応感全体」の得点と学校適応感の下位領域である「心身の健康領域」および、「状態自尊感情」において有意であった(学校適応感全体：男子>女子： $F(1, 401)=5.11, p<.05$ ，心身の健康領域：男子>女子： $F(1, 401)=22.24, p<.001$ ，状態自尊感情：男子>女子： $F(1, 401)=4.03, p<.05$)。この結果は、久世・二宮・大野(1985)による研究結果と一致している。一般的に中学生においては、男子の方が女子よりも学校に適応している、と感じているようである。

また、下位領域を見てみると、そのほかの下位領域について男女差がみられなかったにもかかわらず「学校適応感全体」において男女差がみられたことから、「心身の健康領域」の男女差が非常に大きかったと考えられる。

また、テスト時期による主効果は、学校適応感のうちの「進路領域」と「状態自尊感情」で有意であった(進路領域： $F(1, 401)=4.36, p<.05$ ，状態自尊感情： $F(1, 401)=22.72, p<.001$)。和氣ら(2006)は、「身体活動を行うことによって、生理的变化による直接的なストレス反応軽減だけでなく、自己概念や自尊感情、有能感などの精神的成長や、友だちとの交流を通して自己の感情をコントロールする能力やコミュニケーション能力、ルールを守ることなどの社会的成長が間接的にストレス反応の軽減に役立っている可能性がある」と指摘している。つまり、体育祭を通して身体活動を行うことが自尊感情を高めた可能性が考えられる。しかし、身体活動によってストレス反応が軽減するのであれば、「心身の健康領域」も得点が上昇するはずである。しかし、

そのような結果は得られなかった。これは、身体活動を行うこと自体におけるストレス軽減効果は、体育祭当日の終了直後に質問紙調査を実施していないため本研究では測定できなかったと考えられる。

また、社会的な学校適応感を表す「先生との関係領域」と「友人関係領域」は、和氣ら(2006)の主張とは異なり、体育祭後に得点は上昇しなかった。友人関係領域においては、多数の項目で天井効果がみられたため得点が上昇する余地があまりなく、変化が少なかった可能性が考えられる。また、「先生との関係領域」については、体育祭による一過性の関わりの増加や出来事に左右されるものではなく、日ごろの関わりの積み重ねによって形成されるものであり、環境や状況によって大きく変動するものではないということが示唆された。

また、性別とテスト時期による交互作用は、みられなかった。

2) 学年別での検討

学年別での体育祭前後の学校適応感、および状態自尊感情の得点の変化の違いを調べるために、学年(1学年・2学年・3学年)とテスト時期(体育祭前・体育祭後)を独立変数、「学校適応感」得点、各下位領域、および「状態自尊感情」得点を従属変数とした、二要因の分散分析を行った(表5)。

表5 テスト時期と学年による各得点と分散分析結果

テスト時期	体育祭前			体育祭後			主効果		
	1学年	2学年	3学年	1学年	2学年	3学年	テスト時期	学年	交互作用
学年	<i>n</i> =132	<i>n</i> =123	<i>n</i> =148	<i>n</i> =132	<i>n</i> =123	<i>n</i> =148			
学校適応感全体	103.67 (15.55)	100.37 (12.71)	97.13 (15.96)	102.02 (16.52)	101.49 (14.24)	98.32 (15.79)	0.24	4.43* 1学年>3学年	4.47*
心身の健康	38.24 (8.20)	38.39 (7.77)	36.18 (9.03)	37.52 (9.19)	38.56 (8.42)	37.53 (9.19)	0.64	1.51	3.46*
陰性感情	19.30 (4.88)	18.24 (3.97)	18.16 (4.79)	18.76 (5.07)	18.42 (4.32)	18.37 (4.82)	0.09	1.26	2.39
友人関係	17.69 (2.16)	17.69 (2.41)	17.03 (3.01)	17.47 (2.52)	17.61 (2.53)	16.75 (2.96)	3.35	4.25* 1学年=2学年>3学年	0.30
学習	11.30 (2.32)	10.11 (2.54)	10.88 (2.57)	11.33 (2.68)	10.63 (2.80)	10.80 (2.75)	2.77	4.85**	3.45*
先生との関係	10.77 (2.75)	10.36 (2.51)	9.53 (3.05)	10.55 (3.19)	10.43 (2.64)	9.35 (3.11)	1.02	1学年>2学年 8.02***	0.70
進路	6.37 (1.80)	5.59 (1.74)	5.36 (2.10)	6.39 (1.81)	5.84 (1.72)	5.51 (1.97)	4.54* 体育祭後>体育祭前	1学年=2学年>3学年 10.40***	1.06
状態自尊感情	23.35 (5.05)	22.76 (4.43)	22.34 (5.07)	23.64 (5.46)	23.75 (4.57)	23.39 (4.85)	22.46*** 体育祭後>体育祭前	1学年=2学年>3学年 0.66	2.16

上段：平均値、下段：標準偏差

(*: $p<.05$, **: $p<.01$, ***: $p<.001$,)

学年による主効果は、「学校適応感全体」および、その下位領域である「友人関係領域」と、その下位領域である「学習領域」「先生との関係領域」「進路領域」において学年が上がるにつれて得点が下がる傾向

がみられた(表5)。学年とテスト時期による交互作用は、「学校適応感全体($F(2, 400)=4.47$, $p<.05$)」「学習領域($F(2, 400)=3.45$, $p<.05$)」においてみられた。2学年、3学年と比べて1学年においては体育祭後に

ネガティブな変化が起こった(図1)。小野寺(2009)は、小学生6年生から中学生までの縦断的研究において、「中学校入学直後に学校ストレスが減少するが、その後ストレス反応が増加傾向にあり、これは、適応しようとはしていても変化による負担は避けられないということと、適応しようとする努力による疲れが考えられる」としている。1学年にとっては、今までは教師主催の行事が多く、生徒主導の体育祭ははじ

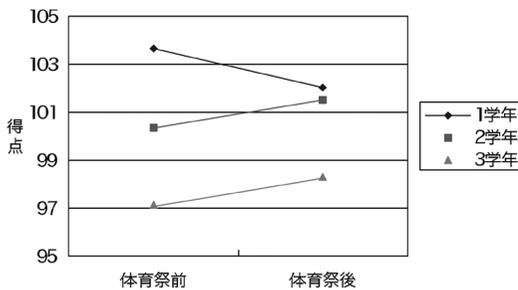


図1 学校適応感全体の学年ごとの得点の変化

めて体験するものであり、体育祭の準備や練習、体育祭本番などではわからないことも多い。その結果、体育祭後に疲弊感が増し、それにより、学校適応感が低くなったと考えられるかもしれない。あるいは、体育祭前には体育祭への期待や楽しみな気持ちから全体的な学校適応感が高まったが、体育祭後には通常の状態に戻った、というように考えることもできる。

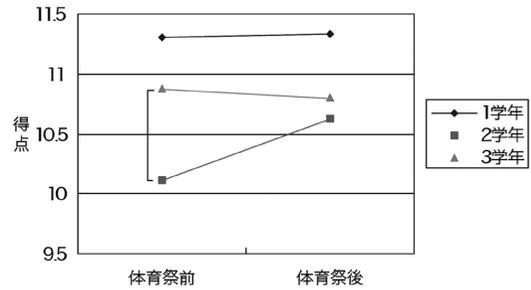


図2 学習領域の学年ごとの得点の変化

「学習領域」は、学年によって体育祭前後の得点の変化のパターンが異なり($F(2, 400)=3.45, p<.05$), 2学年のみが体育祭後に得点が上昇した($F(2, 400)=7.500, p<.01$)。体育祭前では、1・3学年よりも2学年の得点が大幅に低かったが、体育祭後ではその差がなくなっている(図2)。

以上、学年別でみると、1学年においては、体育祭がマイナスにはたらく可能性があるため、予防的な援助が必要であるといえるだろう。また、2学年においては、他学年と比べて低い傾向のある「学習領域」の適応感が体育祭後に高まる可能性が考えられる。2学年は、他学年よりも「学習領域」の適応感が低く、つまりきを抱える危険性が大きいと考えられる。そのため、体育祭

が「学習領域」が低い生徒にとって二次的援助サービスとして機能する可能性が示唆された。

3) 登校場所(教室登校生徒と相談室登校生徒)別での検討

教室登校生徒と相談室登校生徒において体育祭の前後で「学校適応感」の得点と「状態自尊感情」の得点の変化に差があるかを検討するために、登校場所(教室登校生徒・相談室登校生徒)とテスト時期(体育祭前・体育祭後)を独立変数、「学校適応感全体」の得点、各下位領域、および「状態自尊感情」の得点を従属変数とした二要因の分散分析を行った(表6)。

表6 テスト時期と登校場所による各得点と分散分析結果

テスト時期	体育祭前		体育祭後		主効果		
	男子	女子	男子	女子	テスト時期	登校場所	交互作用
性別	n=5	n=398	n=5	n=398			
学校適応感全体	69.20 (9.96)	100.65 (14.76)	78.00 (11.98)	100.78 (15.48)	4.95* 体育祭後>体育祭前	17.47*** 教室登校生徒>相談室登校生徒	4.67*
心身の健康	23.40 (6.50)	37.71 (8.31)	30.80 (7.69)	37.93 (8.57)	6.51* 体育祭後>体育祭前	9.44** 教室登校生徒>相談室登校生徒	5.78*
陰性感情	10.40 (2.30)	18.66 (4.53)	11.20 (3.27)	18.61 (4.70)	0.26	16.34*** 教室登校生徒>相談室登校生徒	0.34
友人関係	12.40 (2.51)	17.51 (2.53)	12.40 (4.83)	17.31 (2.63)	0.05	22.00*** 教室登校生徒>相談室登校生徒	0.05
学習	9.20 (2.78)	10.80 (2.52)	9.20 (3.11)	10.94 (2.75)	0.03	2.30	0.03
先生との関係	9.00 (1.41)	10.20 (2.85)	10.00 (1.87)	10.08 (3.06)	0.83	0.27	1.39
進路	4.80 (2.17)	5.77 (1.94)	4.40 (1.67)	5.92 (1.87)	0.19	2.38	0.86
状態自尊感情	17.80 (4.92)	22.86 (4.85)	19.40 (9.29)	23.63 (4.89)	2.58	5.00* 教室登校生徒>相談室登校生徒	0.32

上段：平均値、下段：標準偏差

(*: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$,)

「学校適応感全体」とその下位領域である「心身の健康領域」において、テスト時期(体育祭前後)による主効果がみられ、体育祭後得点が上がった。また、「学校適応感全体」および、「心身の健康領域」においては、登校場所とテスト時期の交互作用がみ

られた(学校適応感全体： $F(1, 401)=4.67$, $p < .05$, 心身の健康領域： $F(1, 401)=5.78$, $p < .05$)。教室登校生徒は体育祭の前後で得点に変化がなかったのに対し、相談室登校生徒は体育祭後に得点が高くなった(図3、図4)。

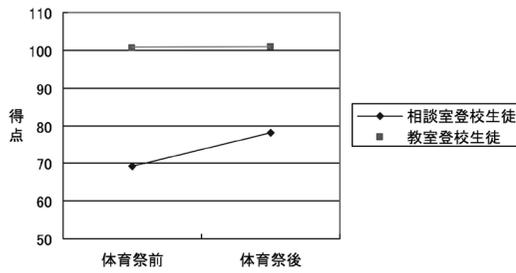


図3 学校適応感全体の登校場所ごとの得点の変化

また、「学校適応感全体」と、その下位領域である「心身の健康領域」「友人関係領域」、さらに「状態自尊感情」において登校場所による有意な主効果がみられ、いずれも教室登校生徒の方が高かった。つまり、石隈(1999)のいう学校生活につまづきを抱えている生徒に対する三次的援助サービスとして、体育祭が有効である可能性が考えられる。つまづきを抱えている生徒の「心身の健康」の適応感をあげるためにも体育祭が活用できる可能性が示唆された。

しかし、なぜ体育祭の後で「心身の健康領域」の学校適応感が上がったのだろうか。相談室登校生徒にとっては、学校行事を通して普段よりもクラスメイトや友人、教師との関わりが増え、クラスの一員としての作業や活動が増えることで所属感が高まった可能性が考えられる。あるいは、体育祭に参加できたことによる達成感や充実感から上昇したとも考えられる。別の観点からみると、体育祭前には、参加できるかどうかという不安感から低下した「心身の健康領域」の適応感が体育祭後に、もとの状態に戻った可能性もある。

また、状態自尊感情において、教室登校生徒の得点が相談室登校生徒よりも有意に高かったが、これは、粕谷・河村(2004)の

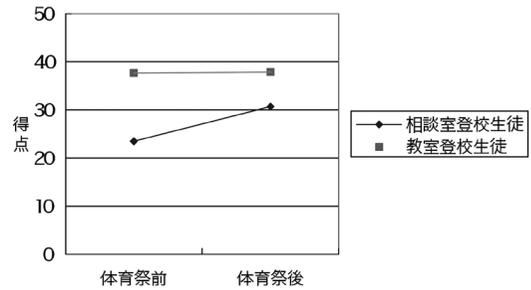


図4 心身の健康領域の登校場所ごとの得点の変化

研究結果と通じるところがある。つまづきを抱えている生徒、つまり、相談室登校生徒の自尊感情は一般の生徒に比べると低いことが推察される。さらに、体育祭後も相談室登校生徒の「状態自尊感情」の得点は変化せず低いままであった。そのため、相談室登校生徒に対する、自尊感情を高めるための援助サービスとして他のアプローチが必要であると考えられる。

4. 学校適応感の各下位領域が状態自尊感情に与える影響の検討

「学校適応感」の各下位領域が「状態自尊感情」に与える影響を検討するために、体育祭の前後それぞれでステップワイズ法による重回帰分析を行った(表7)。

体育祭前では、「心身の健康領域」($\beta=0.40$, $p<.001$)と「先生との関係領域」($\beta=0.22$, $p<.001$)と「学習領域」($\beta=0.20$, $p<.001$)から「状態自尊感情」に対する標準偏回帰係数が有意であった。

体育祭後では、「心身の健康領域」($\beta=0.41$, $p<.001$)と「学習領域」($\beta=0.23$, $p<.001$)と「先生との関係領域」($\beta=.018$, $p<.001$)から状態自尊感情に対する標準偏回帰係数が有意であった。

上記の結果から、体育祭の前であっても

後であっても状態自尊感情に影響を与えるのは「心身の健康領域」「学習領域」「先生との関係領域」の3領域であった。しかし、体育祭の前後で影響の強さが異なり、体育祭前では、「心身の健康領域」の次に影響を与

える因子が「先生との関係領域」であるのに対し、体育祭後では、「心身の健康領域」の次に「学習領域」が「状態自尊感情」に影響を与えていた。

表7 重回帰分析の結果

	体育祭前	体育祭後
	β	β
心身の健康領域	0.40***	0.41***
先生との関係領域	0.22***	0.18***
学習領域	0.20***	0.23***
R^2	0.32***	0.33***

(*: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$,)

β : 標準偏回帰係数

この結果より、先行研究(河村, 1999, 久世・二宮・大野, 1985, 西尾, 2001, 牧田・荒木, 1996など)が示すように、「学校適応感」が「自尊感情」に影響を与えている可能性が示唆された。さらに、本研究においては、その中でも特に、学校適応感の「心身の健康領域」が「自尊感情」に影響を与えていることが明らかとなった。つまり、身体的にも心理的にも健康で安定していると感じている生徒は同時に自分を肯定的にとらえていると考えられる。そのため、体育祭などの「心身の健康領域」の適応感を高める援助を行うことで間接的に生徒の「自尊感情」が高まることが予想される。

IV 総合考察と今後の課題

体育祭の前後で「学校適応感」と「状態自尊感情」の得点に変化するパターンは、男子と女子では体育祭の前後で同じような

得点変化をしていた。男女の得点を総合的にみても、学校適応感の「進路領域」の得点と「状態自尊感情」の得点が体育祭後に高くなった。特に、男子よりも低い傾向がうかがえる女子の「状態自尊感情」が体育祭後に高まっていた。このことにより、体育祭が、「状態自尊感情」が低い女子に対して、予防的にはたらき、二次的援助サービスとしての機能もあることが推察される。

次に学年ごとにみても、1学年については、体育祭後に「学校適応感全体」の得点が下降し、「学習領域」の得点は変化しなかった。また、2学年については、「学校適応感全体」、「学習領域」の得点がともに体育祭後に上昇し、3学年においては、「学校適応感全体」の得点が体育祭後に上昇し、「学習領域」はほぼ変化がなかった。さらに、学年の得点を総合的にみても、学校適応感の「進路領域」と「状態自尊感情」の

得点が体育祭前に比べ体育祭後のほうが高かった。つまり、1学年・2学年・3学年の全体として、体育祭後に「進路領域」の適応感と「状態自尊感情」が高まったと推察される。そのため、2学年においては、「学校適応感全体」、「学習領域」の適応感を高めるために、3学年においては、全体的な「学校適応感」を高めるために体育祭が有効である可能性が考えられる。さらに、2学年においては、体育祭前に他学年と比べて低かった「学習領域」の適応感が体育祭後には、他学年との得点の差がなくなるほどに上昇した。つまり、「学習領域」において学校不適応におちいる危険性が他学年よりも高いと予想される2学年に対して、二次的援助サービスとして機能する可能性が考えられる。また、学年全体としては、体育祭が「進路領域」の適応感と「状態自尊感情」を高めるために有効である可能性が考えられる。しかし、一方で、1学年においてのみ、体育祭後に全体的な「学校適応感」が下る危険性が考えられる。そのため、1学年においては、学年全体で見ると体育祭によって「進路領域」と「状態自尊感情」が高められる可能性がある一方で、全体的な「学校適応感」が減少する危険性もあるため、配慮が必要であると考えられる。

次に、登校場所ごとにみても、教室登校生徒については、体育祭の前後で得点にはほぼ変化がなかったのに対し、相談室登校生徒については、「学校適応感全体」と「心身の健康領域」の得点が体育祭後に上昇した。さらに、体育祭前後のこれらの得点を総合的にみても、「学校適応感全体」と「心身の健康領域」の得点が教室登校生徒よりも相談室登校生徒のほうが低い傾向があ

ることがうかがえた。そのため、特別な援助を必要としている相談室登校生徒に対して、全体的な「学校適応感」と「心身の健康領域」の適応感を高めるために体育祭が機能する可能性が考えられる。

体育祭は全校生徒を対象に行う学校行事であるため、一次的援助サービスに位置付けられると考える。しかし、本研究においては、一次的援助サービスだけではなく、対象生徒の状況によって二次的援助サービスや三次的援助サービスとしても機能する可能性が考えられる。

最後に、「学校適応感」の各下位領域と「状態自尊感情」との関連についてであるが、「状態自尊感情」には学校適応感の「心理領域」と「身体領域」の外的適応感をあらわすと考えられる「心身の健康領域」が中程度の影響を与えていることが推察された。しかし、決定係数がそれほど高くなかったため、「状態自尊感情」には「学校適応感」の下位領域のほかにもさまざまなことが影響していることが考えられる。

また、本研究においての問題点は、調査実施の時期がクラスによって幅が出てしまったことや、ポストテストを実施した時期が必ずしも体育祭の直後というわけではなかったことなどが挙げられる。さらに、他の行事も取り上げて比較検討することで、より詳細で、多様な検討ができると考える。

謝辞

論文作成に協力してくださった全ての方々に感謝致します。ありがとうございました。

<注>

- 1 ゆとり教育：学習時間と内容を減らし、経験重視型の教育方針をもって、ゆとりある学校をめざした教育。
- 2 学力重視型：知識重視型の教育方針。

文献

- 阿部美帆・今野裕之(2007)：状態自尊感情尺度の開発 パーソナリティ研究, **16**, 36-46.
- 蘭千嘉(1992)：セルフ・エスティームの形成と学校の影響 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千嘉(編)セルフ・エスティームの心理学—自己価値の探求— ナカニシヤ出版, pp196-199.
- 遠藤由美(2000)：コンパクト新心理学ライブラリ10 青年の心理学—ゆれ動く時代を生きる— サイエンス社, **48-49**, 92-97.
- 石隈利紀(1999)：心理教育的援助サービスの基礎概念 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス— 誠信書房, pp95-100.
- 粕谷貴志・河村茂雄(2004)：中学生の学校不適應とソーシャル・スキルおよび自尊感情との関連—不登校群と一般との比較— カウンセリング研究, **37**, 107-114.
- 河村茂雄(1999a)：生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発(2) — スクール・モラル尺度(中学生用)の作成— カウンセリング研究, **32**, 283-291.
- 河村茂雄(1999b)：生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発(1) — 学校

- 生活満足度尺度(中学生用)の作成— カウンセリング研究, **32**, 274-282.
- 久世敏雄・二宮克己・大野久(1985)：中学生・高校生の学校生活への適応に関する一研究 日本教育心理学会第27回総会発表論文集, 404-405.
- 牧田明典・荒木紀幸(1996)：中学生における学校内不安に関する基礎的研究 日本教育心理学会総会発表論文集, **38**, 228.
- 水野治久・石隈利紀・田村修一(2003)：中学生を取り巻くヘルパーからのソーシャルサポートと適応に関する研究 コミュニティ心理学研究, **7**, 35-46.
- 文部科学省(1998)：学習指導要領 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youryou/ (2009年10月1日取得)
- 文部科学省(2010)：平成22年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果について http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/_icsFiles/afieldfile/2011/08/04/1309304_01.pdf (2012年9月27日取得)
- 二宮克美・大野久 (1990)：久世敏雄(編)学校における青年 変貌する社会と青年の心理 福村出版, pp157-182.
- 西尾隆(2001). 不登校傾向中学生の自尊感情の状況について 研究集録, **42**, 57-62.
- 小野寺汐美(2009)：小中移行期における学校適応過程に関する一研究 岩手大学大学院人文科学研究科紀要, **18**, 19-40.
- 和氣綾美・山本浩二・藤塚千秋・藤原有子・橋本昌栄・米谷正造・木村一彦(2006)：

中学校期の心の健康に及ぼす運動の影響と学校の工夫について 川崎医療福祉学会誌, **16**, 247-259.

渡部邦雄(1994)：新しい学力観と特別活動
渡部邦雄・須藤稔(編)新しい学力観
に立つ中学校特別活動の評価・授業改善と通信簿 明治図書出版, pp1-11.

